

B. 試掘調査結果

井山城は別名飯峯城^{いぼみねじょう}とも呼ばれており『大日本地名辞書』では阪南町の井関山に、『大阪府史跡名勝天然記念物』では地籍図及び淡輪氏との関連で阪南町飯峯地区にあてている。

飯ノ峯畑集落の東北にある山頂には4つの平坦地があり、『日本城郭大系12』は集落に一番近い海拔110mの平坦部を曲輪とし、『阪南町埋蔵文化財分布調査報告書』においては空堀状の窪みを報告している。これらの事と併せて、地元伝承等からも尾根上に城に関係する何らかの遺構が十分に想定される。

調査対象区は字名を中心に伐採、伐木した約25,000㎡の山頂、山腹部分である。尾根上の四つの平坦面を通して幅2～4mのトレンチを設置した。又、段丘状を呈した地形や豎堀が予想される斜面には幅4mのトレンチを随所に設置した。検出された遺構、遺物の記述は本調査と合致するところも多く、第3章にあわせて報告する。

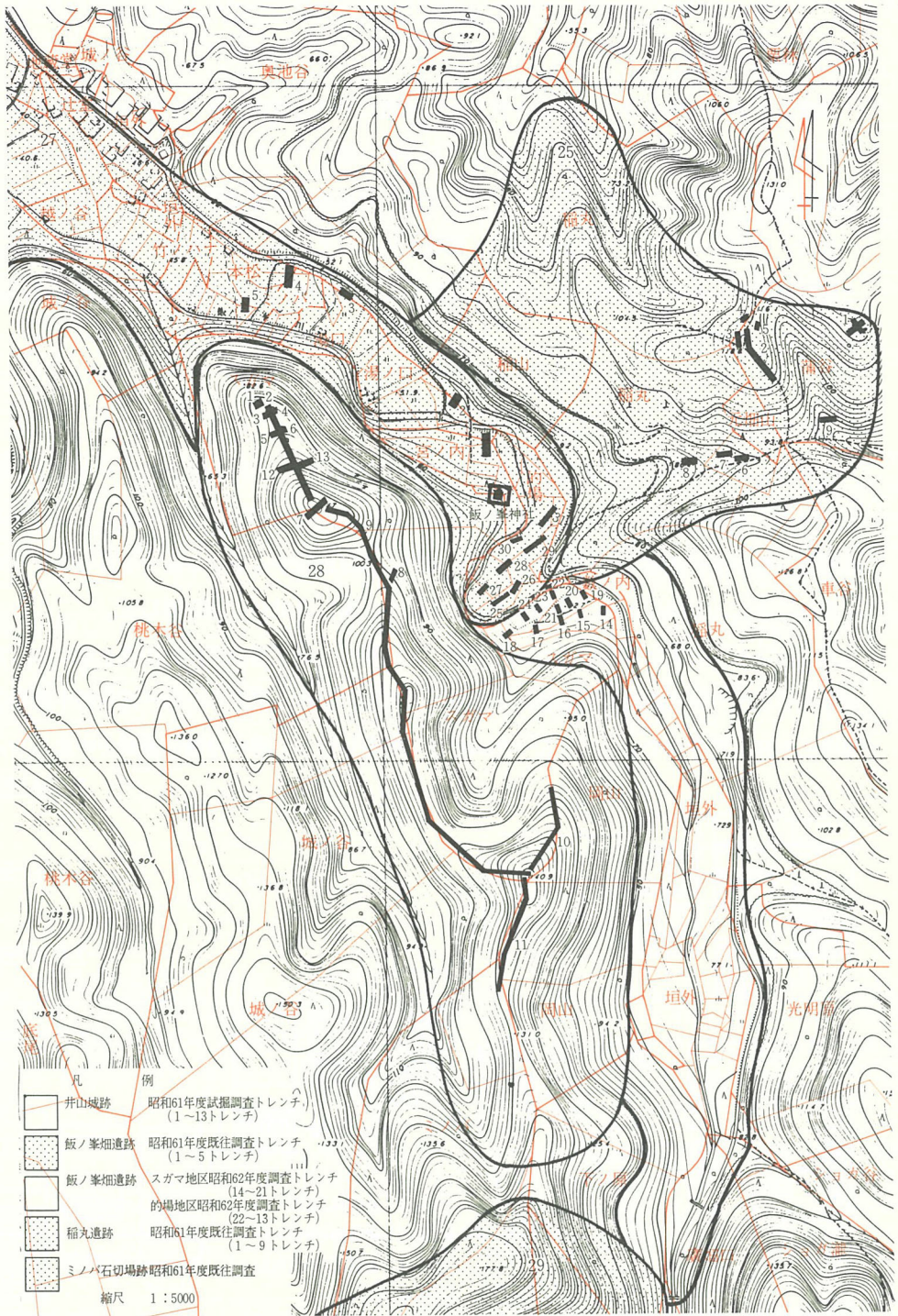
遺構面は表土直下において検出された。廃城後、人為的に手が増えられた様子はみられず良好な残存状況が伐開後の地形にも表われている。(巻頭図版)

現地形で確認できる大規模な平坦地は4つあるが、後のA地区にあたる集落に近い平坦面は、急峻な斜面にむけて豎堀状遺構が検出された(第3トレンチ)。

B地区に該当する斜面には、地山を削平して造りだした曲輪(本調査227-OX)を検出した(第2トレンチ)。又、人為的と思われる削平箇所もみられる(第8トレンチ)。

D地区に該当する範囲は、集落から最も離れた海拔142mの平坦地において礎石建物跡(本調査250-OB)3間分を検出した(第9トレンチ)。この平坦面は砂岩盤の地山を切り盛りして造りだされている曲輪(本調査255-OX)で面積約130㎡を測る。この曲輪の礎石建物より15世紀代の瀬戸碗破片2点を出土した。四方は急峻な斜面を呈しており、曲輪西側に堀切(本調査254-OX)を検出した(第10トレンチ)。砂岩盤の方向が変化する地形を巧みに用い、堀の底部には東西方向に石列がみられる。堀切のさらに西側には、小規模の曲輪(本調査256-OX)を検出した(第10トレンチ)。

全国でも南北朝と思われる山城の資料は少く、全容は明らかではない。今回調査した13箇所のトレンチは、随所に山城として機能した遺構を検出し、付近には居館、その他城に伴う施設が充分考えられ、広範囲にわたる調査が望まれる為、城域と考えられる範囲の本調査を行うこととした。(服部)



第11図 井山城跡試掘トレンチ配置図

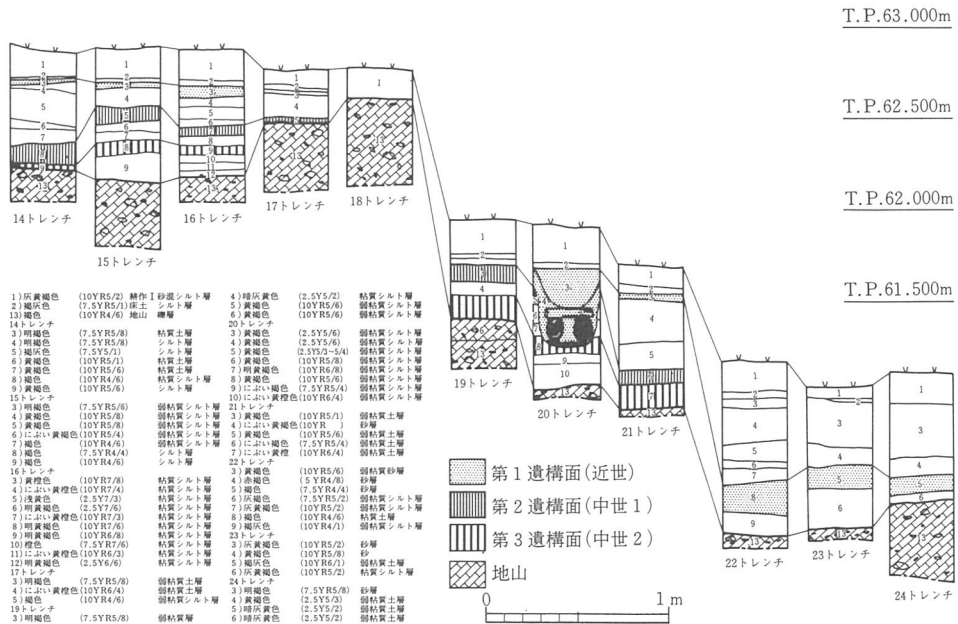
C. 谷部調査結果

調査区は中世山城の存在が確認された丘陵地側に開けた狭山な谷あい部分である。周辺は「的外」「垣外」「スガマ」等の小字名が残り、(第11図) 立地条件にも恵まれている為、城館遺構検出を目的として調査を実施した。付近の旧墓地は現在は用いられていないが、中～近世、人口増大に伴い、斜面を形成し墓域を拡大している。又、石仏、石祠、道標等、土地開発が窺われる。調査区は、字名より飯ノ峯川左岸を「スガマ地区」、同右岸を「的場地区」として報告する。

「スガマ地区」

山裾部分の伐採後、丘陵先端部東麓を、東西方面に石垣で三段に区画していることが確認された。近年畑地として利用されていた為、東西方向の畝が調査地区全域にわたってみられた。排水溝も各段ごとに設けられている為、畝に直行する形で2m×6mのトレンチを各段ごとに、上段5ヶ所、中段3ヶ所、下段3ヶ所、合計11ヶ所設置した。

第14トレンチ 旧耕土下層に近世小溝群が二枚、(第一、第二遺構面) 地山直上層に中世溝が検出された(第三遺構面)。遺物は瓦器碗、土師器の細片が出土した中～近世の小溝群、溝はともに東西方向である。G L—65cm前後で礫層に達し、湧水の為、掘削を中止した。



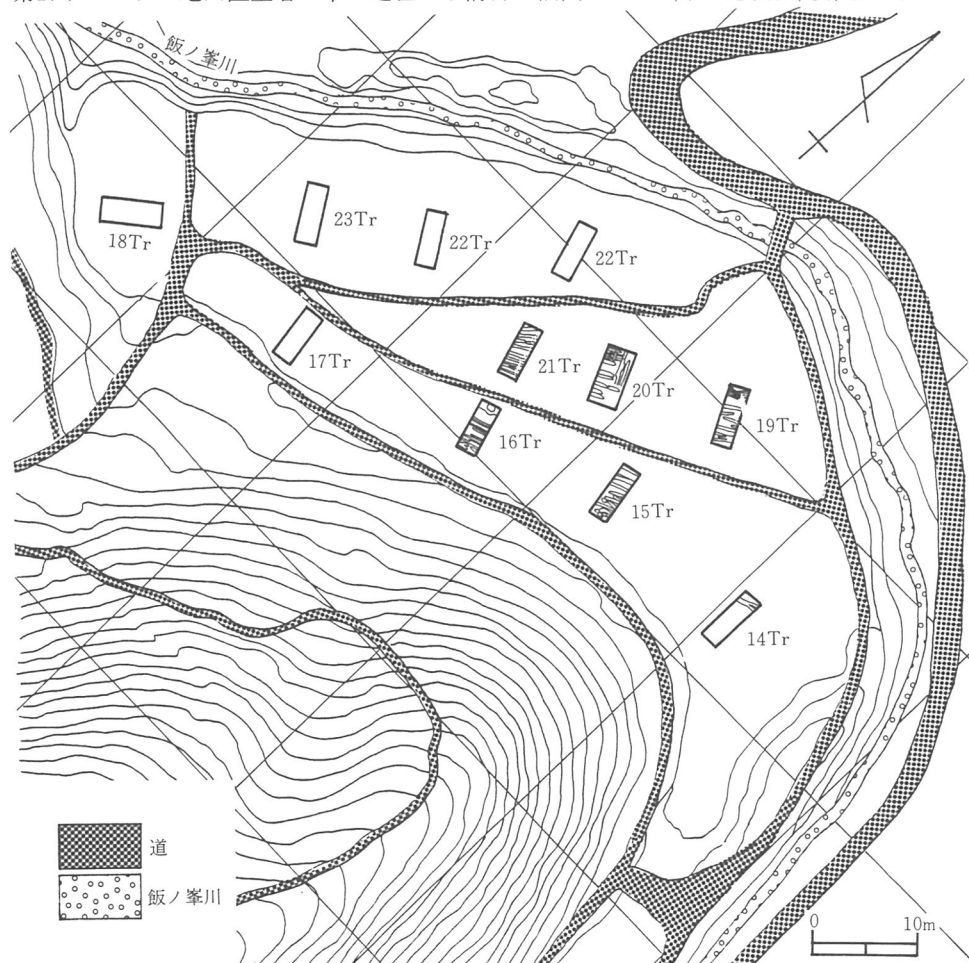
第12図 スガマ地区 土層柱状図

礫は人頭大で飯ノ峯川の旧河道と思われる。

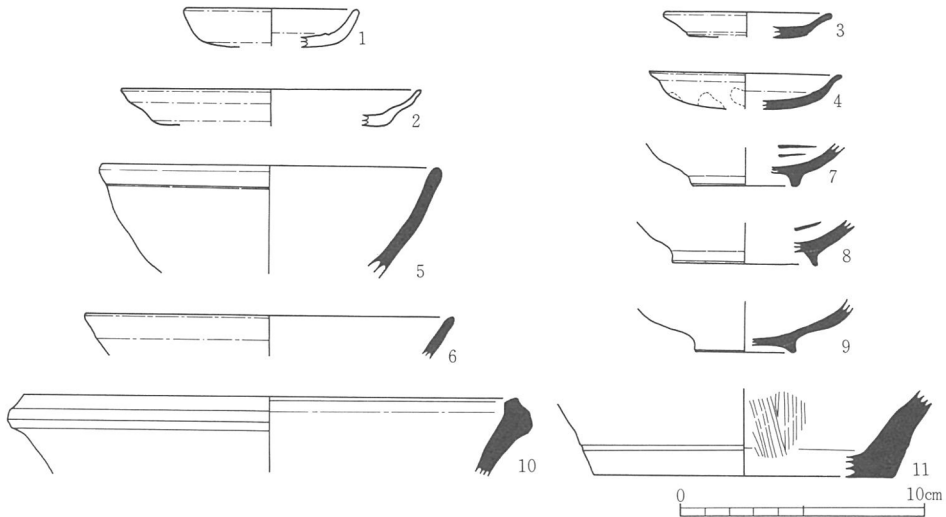
第15トレンチ 基本層序は第14トレンチと同様である。近世小溝群（第一遺構面）、中世小溝群（第二・三遺構面）が検出された。遺物は全て細片である。G L 60~70cmで砂礫層に達する。

第16トレンチ 遺構内より時期を限定しうる遺物が少ない為、詳細は不明である。第二遺構面より、瓦器碗と思われる土器片及び瓦質鉢（第14図10）が出土している。前後のトレンチから基本層序は第14、15トレンチと同様と考えられよう。飯ノ峯川の旧河川が蛇行し、ややはずれた為か湧水もなく、安定した堆積をみせ、連続した耕作面がみられる。G L 70cmでわずかに小礫を含む層に達する。

第17トレンチ 地山直上層に中~近世の小溝群が検出された（第一遺構面）。礫層が北側に



第13図 スガマ地区 中世遺構概略図



第14図 スガマ地区 出土遺物(一)

傾斜している為、G L-20~40cmにおいて小礫を含む層になるが遺構面はその礫層を切りこむ形で北側に集中している。

第18トレンチ 旧耕土直下はG L-5~20cmは砂礫層である。山裾の急斜面を造成し平坦面を作り出している。旧耕土層に瓦器碗破片が含まれていたが遺構は検出されなかった。

第16~18トレンチの最下層小礫の様相を酷似しているが、排水施設・石垣等はみられず、地目も荒地であったため詳細は不明である。

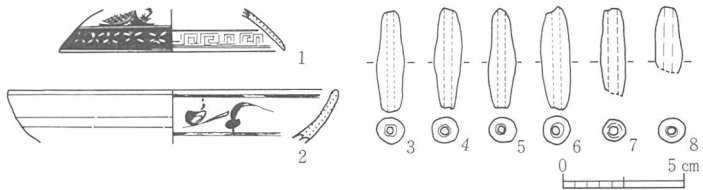
第19トレンチ 旧耕土下層に近世小溝群（第一遺構面）、中世小溝群（第二遺構面）が検出された。瓦器碗、陶磁器片（第14図7、8）が比較的多く検出された。G L-50cmを測る所で小礫、及び人頭大の礫層に達し湧水する。その様相は、第14・15トレンチの礫層に相似している。飯ノ峯川の旧河道が北側に蛇行したと思われる。

第20トレンチ 旧耕土下層に近~現代の排水施設である抜き水がトレンチ西端で検出された為2m×6mのトレンチを幅4mに広げた。材は松を用いており、レールのように敷いて南北方向に排水している。下層に近世の小溝群（第二遺構面）、中世の小溝群（第三遺構面）が検出された。G L-80~100cmで礫層に達する。中段に設置した3つのトレンチ（第19~21トレンチ）は比較的遺物の出土量も多く、特に第20トレンチは土師器・瓦器・瓦の他、最下層より黒色土器片、須恵器片（第14図5、11）も出土しており、他のトレンチより若干時期があるようである。付近に集落の可能性も考えられよう。



第15図 スガマ地区 近世遺構概略図

第21トレンチ 旧耕土下層に中～近世の小溝群（第一遺構面）、中世の小溝群（第二遺構面）が検出された。各層に土師器細片、瓦器碗片が含まれる（第14図1、3、4、6）



第16図 スガマ地区 出土遺物(二)

第22～24トレンチ 飯ノ峯川に最も近い下段に設置されたトレンチからは、共通して旧耕土層直下に厚い砂の流水堆積層がみられる。流木等を多量に含み短期間に堆積した跡が窺われる。G L—50～60cmで近世の水田跡を検出した（第一遺構面）。第22・23トレンチの水田面には大小の足跡を検出した。いずれも埋土は砂層であり、洪水や飯ノ峯川の増水により耕作不可能となったと考えられる。

従来、遺構の存在が認められなかった、飯ノ峯川流域平野部であったが「スガマ地区」全域において、近世の水田・畑・水利施設及び中世の畑・水路等を検出した。

各トレンチともに最下層は厚い砂層、礫層が確認でき、中世以前に河川の氾濫が著しかったことを物語る。江戸時代においても『山中家文書』の嘉永4年（1851年）7月13日の洪水の記録は、当該地域周辺に大被害をもたらした飯ノ峯畑村が廃村となったことが明らかにされている。下段に設置した3つのトレンチから出土した染付等の時期より第22～24トレンチの水田面を覆う砂の堆積とほぼ合致するものと考えてよいと思われる。

城郭関係遺跡の検出を目的とした試掘調査であるが、井山城跡直下の谷あい部分において検出された水田、畑より15世紀の瓦器を出土するが城として機能していた時期と並行するか否かは現資料では断定しえない。平野部分において直接城に伴う遺構（馬出し、虎口、館等）は検出できなかったが、今後、曲輪の形態や機能を考えると同時に、引き続き館等日常生活の遺構検出に努める必要がある。平野、谷部において、広義の意味の城域を確定することが課題として残っている。 (服部)

「的場」地区

第25トレンチ 幅2m長さ13mのトレンチである。地表下1.7mまで掘り下げた。現耕土・床土層直下の地表下0.3m（標高59.80m）で砂礫層に達した。砂礫層の層理面は緩やかな波状を描いていた。

第26トレンチ 幅3m長さ10mのトレンチである。地表下1mまで掘り下げた。現耕土・床土層下に旧耕土層の水平堆積が認められた。旧耕土層下の微砂・礫まじり細砂層とシルト質粘土層とが、南から北に向かって緩やかな傾斜をもって堆積していた。シルト質粘土層からは、土師器釜と瓦器椀が出土した。

瓦器椀は口縁部の破片（第18図3）と底部の破片（第18図2）がある。（3）は口縁端部内面に沈線がめぐり、内面には粗い磨きが施されていた。外面は磨滅が著しいため調整は

不明。(2)は高台径5.8cm、高台の断面形は台形。底部内面に磨きは施されていない。

土師器釜は口縁部約六分の一の破片(第18図1)。口縁部は外反し口縁端部が内面上方につまみ上げられている。球形の体部に短い鏝がつく。胎土には片岩の細片を多く含む(色調7.5Y R 浅黄橙 8 / 6)

第27トレンチ 幅2.5m長さ9mのトレンチである。地表下1.3mまで掘り下げた。現耕土・床土層直下の地表下0.3m(標高59.20m)で砂礫層に達した。砂礫層の層理面は緩やかな波状を描いていた。砂礫層には拳大の礫が多く含まれていた。砂礫層下には砂質シルト・細砂・微砂層が堆積していた。砂礫層からは、近世陶磁器が出土し、微砂層からは瓦器碗が出土した。

第28トレンチ 幅2.5m長さ12mのトレンチである。地表下1.1m、部分的に地表下1.5mまで掘り下げた。現耕土・床土層直下の地表下0.3m(標高58.00m)で拳大から人頭大の石を含む砂礫層に達した。

床土層から近世陶磁器碗、白磁合子蓋、瓦器碗が出土した。白磁合子蓋は五分の一を欠く。口径4.7m、器高1.2cm。

第29トレンチ 幅2.5m長さ18mのトレンチである。地表下1.5mまで掘り下げた。現耕土・床土層以下粘土層または礫混じり粘土層(地山)に達するまでにはシルト層とシルト質粘土層とが互層に水平に堆積していた(旧耕土層)。旧耕土層は、上層(3~5層)と下層(6~9層)とに分けることができ、その層理面で小溝を40条検出した。溝は幅10~30cm、深さ5cm、溝の断面形は浅い皿形を呈した。溝の方向は現水田の長軸方向であった。旧耕土上層からは、青磁碗、瓦器碗・甕・釜、土師器皿・甕、瓦等が出土し、旧耕土層下からは土師器皿、瓦器甕、須恵器鉢が出土した。

青磁碗(第18図4)は口縁部の破片。篋先による細線の線描蓮弁文を持つ。細線と剣頭とが蓮弁としての単位を示している。

第30トレンチ 幅2m長さ8mのトレンチである。地表下1.1mまで掘り下げ、部分的に1.5mまで掘り下げた。現耕土・床土層以下粘土層または礫混じり粘土層までの間には微砂層が水平に堆積していた。微砂層上層は酸化層で、下層は還元層であった。微砂層上層からは、瓦器甕、瓦等が出土し、微砂層からは土師器、瓦器碗、須恵器が出土した。礫混じり粘土層には、拳大から人頭大の礫が含まれており、土師器と瓦器碗が出土した。

第31トレンチ 幅2.5m長さ18mのトレンチである。地表下1.1mまで掘り下げ、部分的に1.4mまで掘り下げた。現耕土・床土層から礫混じり粘土層(地山)に達するまでの間には

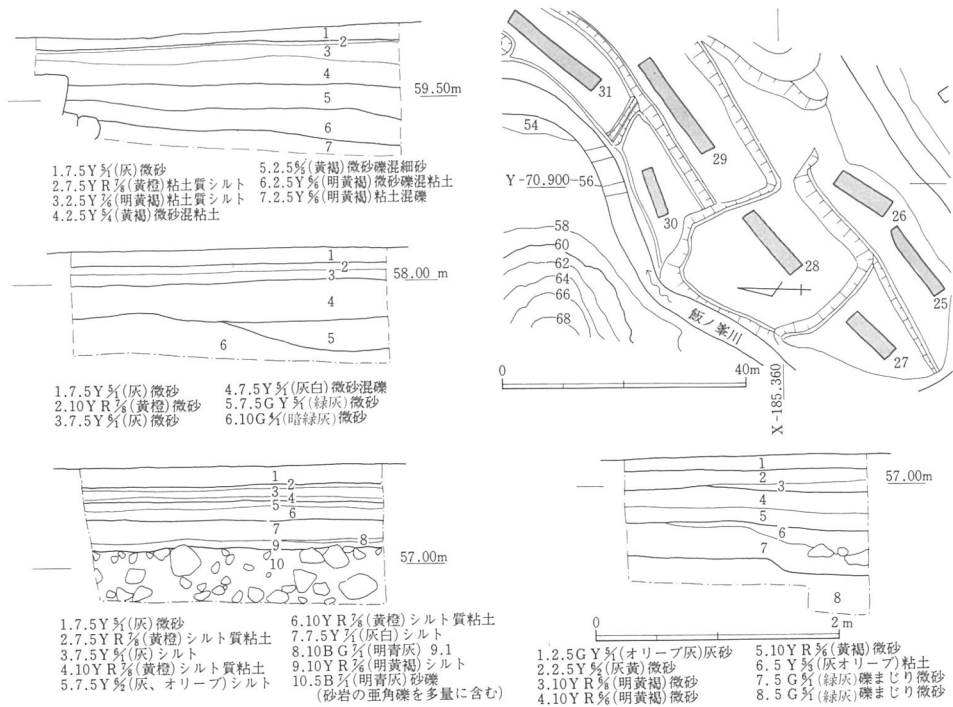
シルト層（旧耕土層）が水平に堆積していた。床土層からは、銭貨が出土した。シルト層上層は酸化層で、下層は還元層であった。シルト層上層からは、青磁碗、白磁皿、瓦器椀・皿・甕・釜、須恵器坏等が出土し、シルト層下層からは土師器皿、瓦器椀、須恵器甕、石器等が出土した。

銭貨（第18図7）は中国北栄銭天聖元寶（順読真書体 初鑄1023年）で外径2.48cm、内径2.04cm、重量2.61gであった。白磁皿（第18図6）は口縁部の破片、口縁部が強く外反する。青磁碗（第18図5）は口縁部の破片。石器（第18図8）はサヌカイトの楔形石器で長5.4cm、幅2.05cm、厚さ1.075cm。

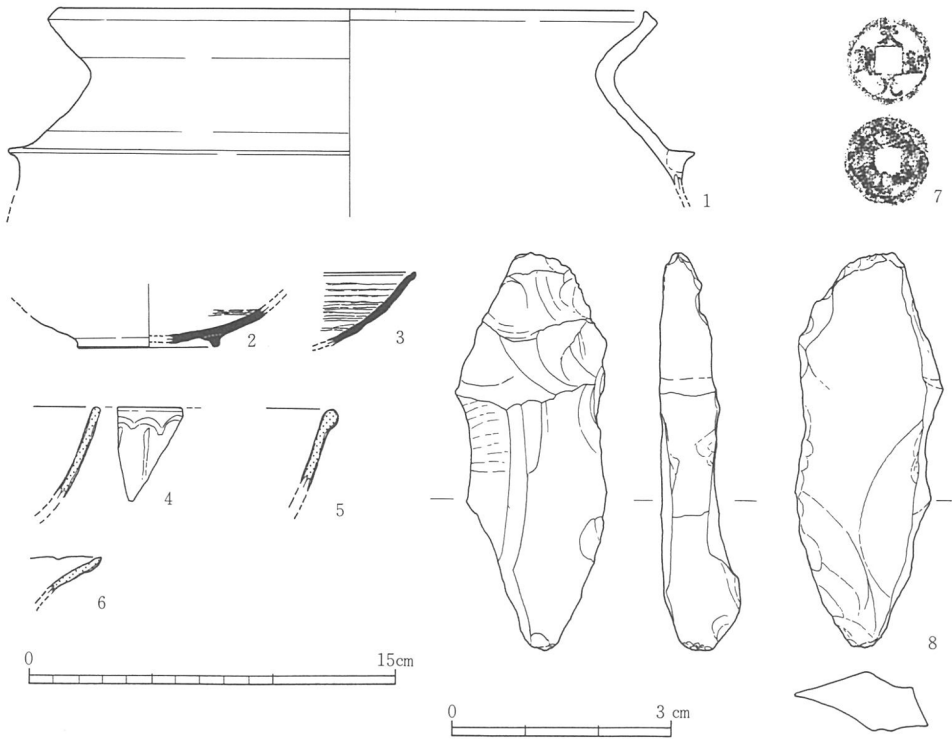
調査の結果、井山城に直接関係する遺構は検出できなかった。

25、27、28、30トレンチでは近世以降の河道にともなう堆積土が確認できた。砂礫層は河道の流れが早かったことを示し、砂土層は河道の流れの遅かったことを示す。

26トレンチの堆積土は、地山の検出状況から丘陵から流れて土が自然に堆積した状況を示していた。



第17図 的場地区 トレンチ配置図及び土層断面図



第18図 的場地区 出土遺物

29・31トレンチは、中世以降比較的安定した場所として耕作地として利用されていたことが推測できた。(佐々木)

第2節 井山城跡

飯ノ峯畑の丘陵地に山城が存在する可能性はすでに指摘されており、飯峯城の名が与えられている。しかし、その確認は行なわれておらず、山城としての規模や構造は不明であった。文献史の方面では、この山城を中世文書に散見される「井山城」に比定する見解がある。今回の調査では山城の規模や構造の一端を確認し、山城の存在が事実であること、さらに遺物の年代も井山城の時期とほぼ一致することを確認した。従って、従来の成果と合わせ、本遺跡が井山城である可能性は高くなったと言える。そこで、本書ではこの山城を「井山城」として扱い、記述するものである。

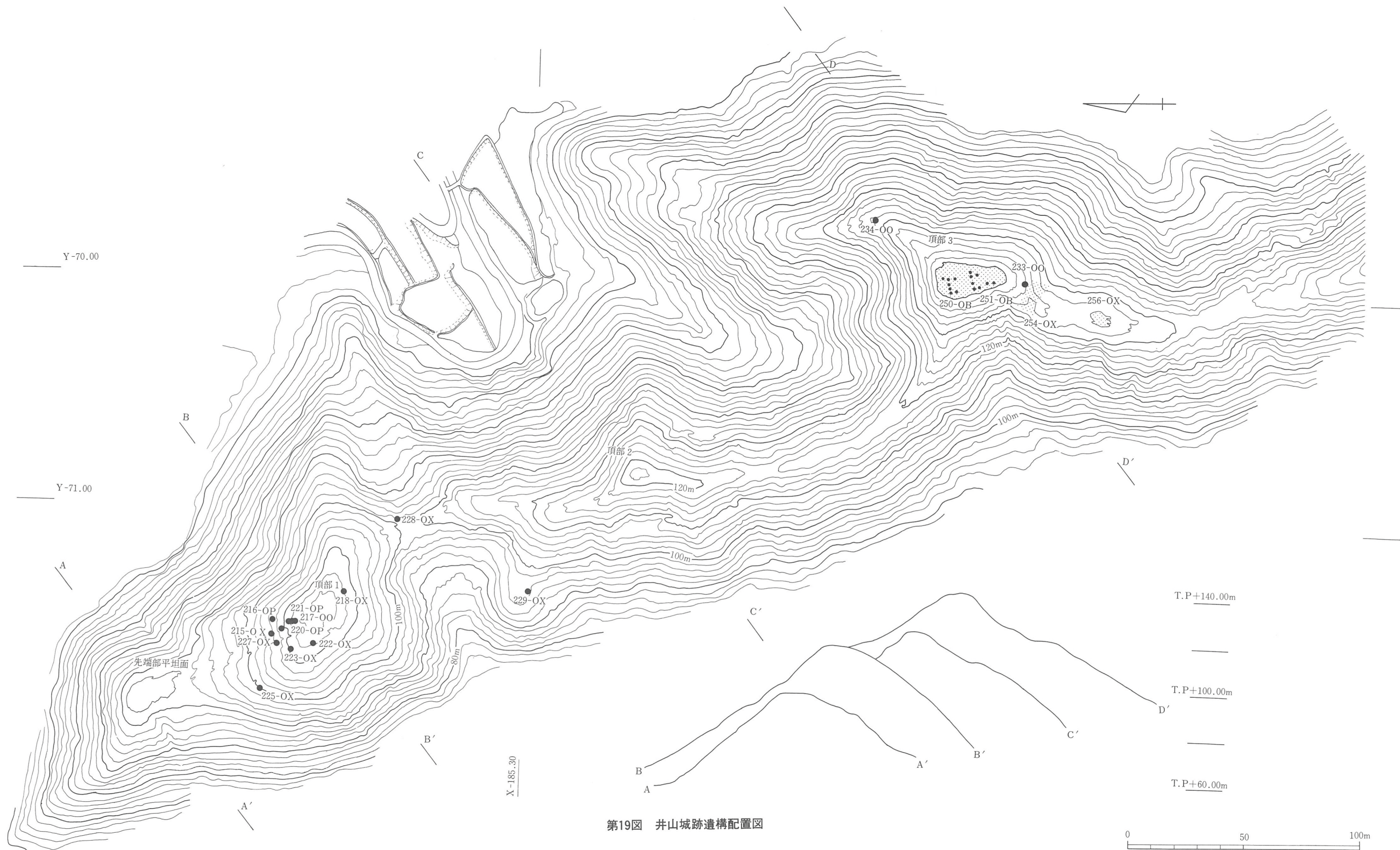
井山城の存在する丘陵は南東から北西に伸びており、標高93m～142m、比高45m～75mを測る。丘陵先端部と3ヶ所の頂部に狭小な平坦部があり、頂部を繋ぐ鞍部は極端な瘦尾根となっている。

検出した遺構は、曲輪状遺構5基、建物2棟、堀切1条、石組遺構3ヶ所、土壇15基、ピット3基がある。遺構は3ヶ所の頂部とその周辺の斜面に集中して存在し、丘陵先端部の平坦面には確認していない。先端部からは海を望むことはできないが、両側の丘陵先端部の谷口は観察できる。従って、曲輪等の遺構の存在を予想していた部分である。結果的には人為的造物を検出し得なかったが、北側斜面の傾斜が60度を測り、自然地形だけで十分に防御の役割を果たしていたものと考えられる。

遺構の存在する3ヶ所の頂部を北から頂部1～3とすると、頂部1では北側から北西側斜面にかけて、曲輪状遺構3基、土壇4基、ピット3基、南西斜面と南斜面にそれぞれ土壇1基、頂部2との鞍部に土壇1基が存在する。頂部2の周辺では西側に向かって派生した小尾根の頂部に土壇1基が存在する。頂部3は小平坦面そのものが山頂部を切盛りして構築された曲輪となっており、東半には建物の礎石列を検出している。曲輪西側には堀切があり、さらに堀切前面には小規模な曲輪が配されている。他に石組遺構3基、土壇7基がある。全体としては土壇の数が最も多いが、これらはすべて焼土や焼礫、炭を含む焼土壇で、規模は一定していない。

検出した遺物は極めて少量であるが、すべて頂部3の周辺で検出している。主に曲輪周辺が中心で、瀬戸焼や摺鉢、瓦器、土師器などがある。

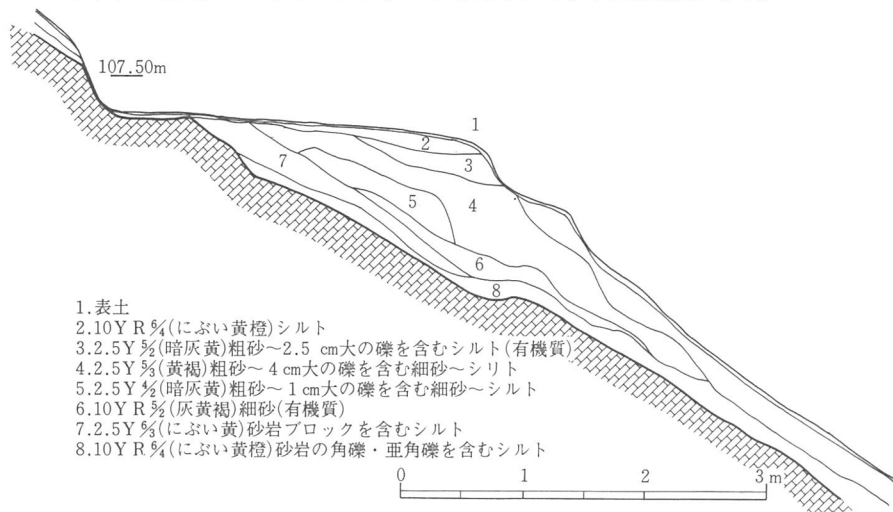
以上のことを勘案すると、標高の最も高い頂部3を中心とした地区が本山城の主体となる部分であると考えることができる。しかし、さほど大規模な構造を示すものではなく、自然地形を十分に利用した防御的な城と見ることができる。 (宮野・禰宜田)



第19図 井山城跡遺構配置図

曲輪1 (215-O X) B地区 F15

頂部1から丘陵先端部に向う稜線上に位置しており約3m幅の平坦面を作り出している。斜面上位をカットし、わずかな平坦面を作り出すように地上整形を施し、それに続けて土盛している。遺存状況は極めて良好である。上位の地山カット部分に由来する土が最上層に堆まれていること(第2層)、下層に旧の表土であったと考えられる層(第6層)が存在することから、他の遺構より時期が下るものと考えられる。出土遺物はなし。



第20図 曲輪1 (215-O X) 断面図

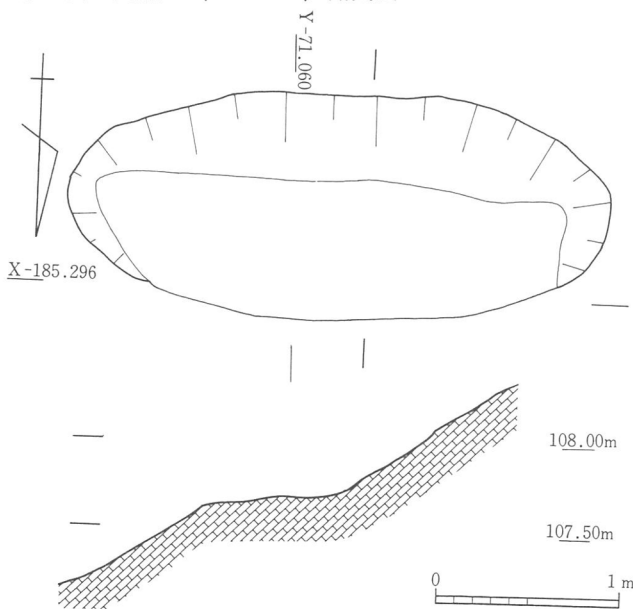
曲輪2 (227-O X)

B地区

F15X J~Y J。

曲輪1の西側に近接して存在するもので、大部分は崩壊している。長さ270cmの人為的なカットがあり、地山整形された幅90cmの平坦面が遺存する。地山整形の状況は曲輪1に類似している。

(宮野)



第21図 曲輪2 (227-O X) 平・断面図

曲輪3 (226-O X) B地区 F15XL~XM。

頂部1の北側斜面の地山面検出調査の過程において不自然な傾斜変換が認められたため精査した結果、幅約130cm、長さ約320cmの水平に近い面を確認することができた。構造的には斜面上位を削り、下方に面を作出したかたちで、カット部分のみでは長さ約8mに達する。人為的な普請とする根拠はないが、平坦面の下方斜面地山直上のⅡ層下部において礎石と考えられる板状の川原石1個を検出していることから、曲輪の崩壊したものと考えたい。位置的には北側斜面の土壌3・4の下方にあたる。(宮野)



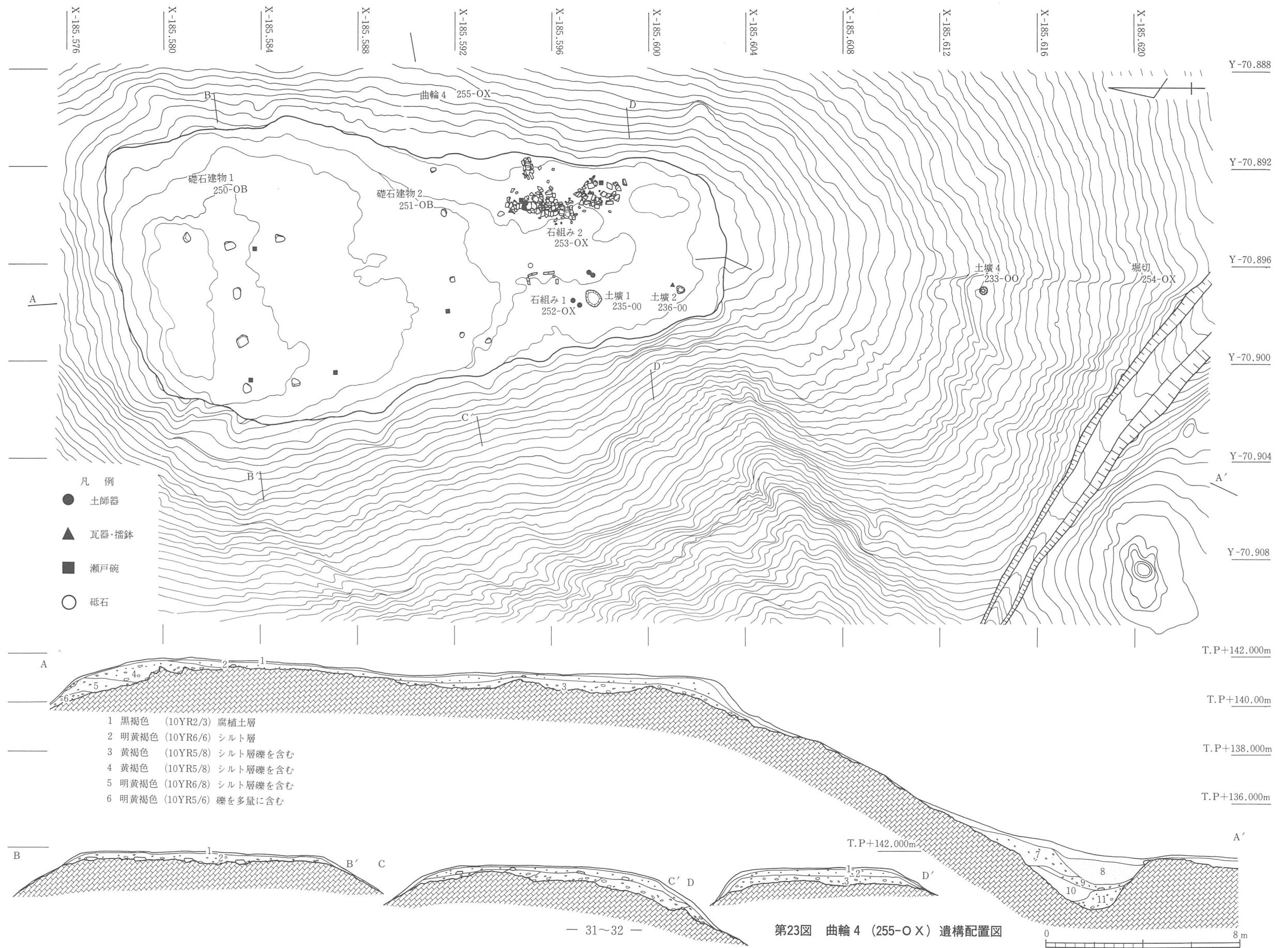
第22図 曲輪3 (226-O X) 平・断面図

曲輪4 (255-O X) D地区

曲輪4は試掘調査第9トレンチの礎石建物跡、第10・11トレンチの盛り土層・又第11トレンチの堀切跡が検出されたことにより曲輪を考えられ、出土遺物から中世山城であることが確認されたものである(第23図)。

当初、曲輪4には先に検出された礎石建物(250-O B)1棟によって機能していると思われていたが、本調査の結果、さらにもう一棟の礎石建物跡(251-O B)を検出した。

曲輪4は頂部3上に極めて良好な遺存状態を示していた。曲輪中央部分の岩盤を削平し、東斜面及び曲輪中央より南半を盛り土していることが判明した。曲輪4は礎石建物を構築するにあたり二度の画期が見られる。



- 凡例
- 土師器
 - ▲ 瓦器・播鉢
 - 瀬戸碗
 - 砥石

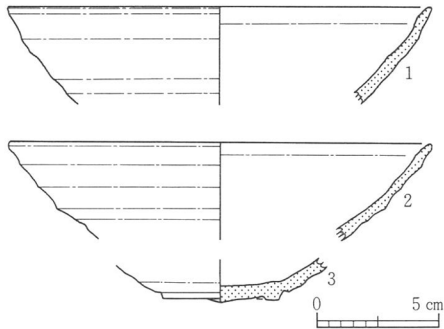
- 1 黒褐色 (10YR2/3) 腐植土層
- 2 明黄褐色 (10YR6/6) シルト層
- 3 黄褐色 (10YR5/8) シルト層礫を含む
- 4 黄褐色 (10YR5/8) シルト層礫を含む
- 5 明黄褐色 (10YR6/8) シルト層礫を含む
- 6 明黄褐色 (10YR5/6) 礫を多量に含む

第23図 曲輪4 (255-OX) 遺構配置図

曲輪4の三方は各々痩せ尾根が派生しており、特に東斜面と北斜面は急峻で、南斜面には堀切を構築し、曲輪4に対する防御施設を作り出している。曲輪の総面積は約127㎡（約38坪）を測るが、当初から現況と同じ面積であったかどうか不明である。250-O Bは腐植土を除去すると岩盤直上に礎石をすえ置き、廃城後、二次堆積等はみられない。250-O Bが城として機能していた時点に251-O Bは埋めたてられた形で検出された。出土遺物から礎石建物250-O Bは15世紀、251-O Bは14～15世紀と考えられる。250-O Bは3間×1間東西6.2m、南北2.5mを測り、建物の北側に一段高い遮敵物を構える。251-O Bは曲輪4中央に250-O B同様3間×1間の礎石建物を検出したが、わずかに規模が大きく東西7m、南北2mを測る。251-O Bに付随するものとして、石組み遺構2（252-O X・253-O X）、焼土壇2基（235-O O・236-O O）を検出した。出土遺物は14世紀代の土師皿、15世紀代の瓦器細片、15世紀の瀬戸平椀、東播系のすり鉢の他、大型の砥石が出土した。（服部）



第24図 礎石建物1（250-O B）平・断面図



第25図 礎石建物 1 (250-O B) 出土遺物

礎石建物跡 250-O B

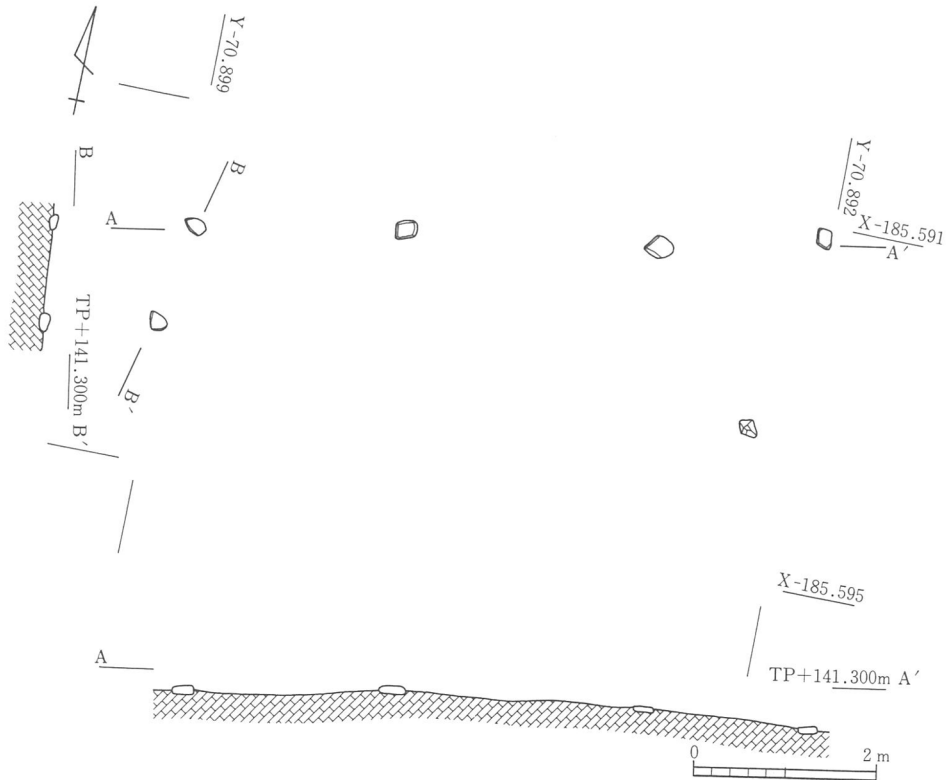
D地区 K01UY~K02UB。

曲輪4の東端で検出した。やや大ぶりの平坦な石を用い岩盤直下に3間×1間の礎石建物を構築している。

建物の北側には地形を利用し、わずかに、一段高い遮蔽物を構築し北面に対する防御機能を想定しうる。建物に付随する遺構は検出されなかった。

礎石付近より15世紀の瀬戸平碗破片2点が出土した。いずれも細片である。

遺構遺物ともに簡素な様相を示すことにより、極めて短期間に用いられ中世城郭と思われる。(服部)



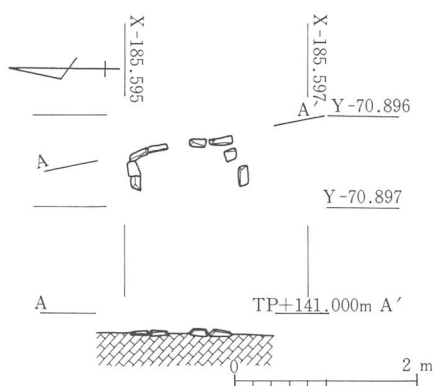
第26図 礎石建物 2 (251-O B) 平・断面図

礎石建物 251-O B D地区

曲輪4の中央から検出した。250-O B同様、礎石は250-O Bに比やや小ぶりで建物の規模は、7 m × 2.5 m と大きい3間 × 1間の礎石建物である。調査区南端はややすぼまって形を呈しており、建物の南側の面積は盛り土によって平坦面を作り出しているが、極めて狭小な面積の中に251-O B礎石遺物に付随する遺構が検出される。

250-O B、251-O B共に、建物の南側に開放する形を呈する簡素なものである。251-O Bは、建物の外側に当たる部分の東側は石組み遺構、両側は焼土層が検出される。後述する堀切254-O Xは、曲輪4の250-O B、251-O Bのいずれに伴うものか不明である。

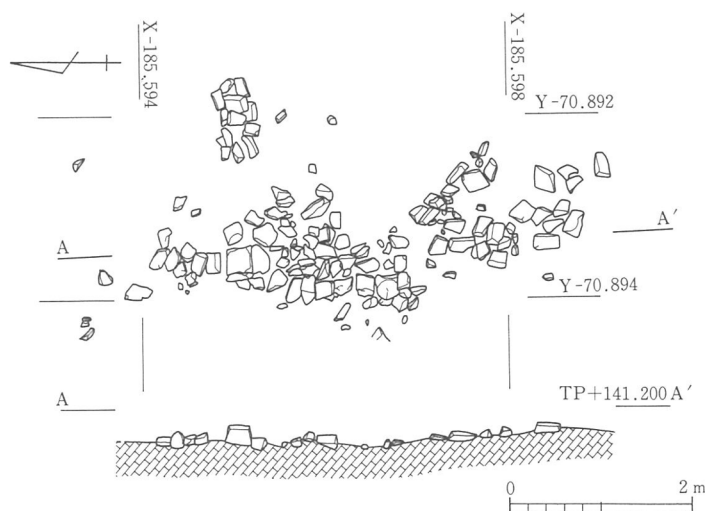
251-O B礎石付近から15世紀の瀬戸平碗が出土した。(服部)



石組み (252-O X) D地区 X A、Y A

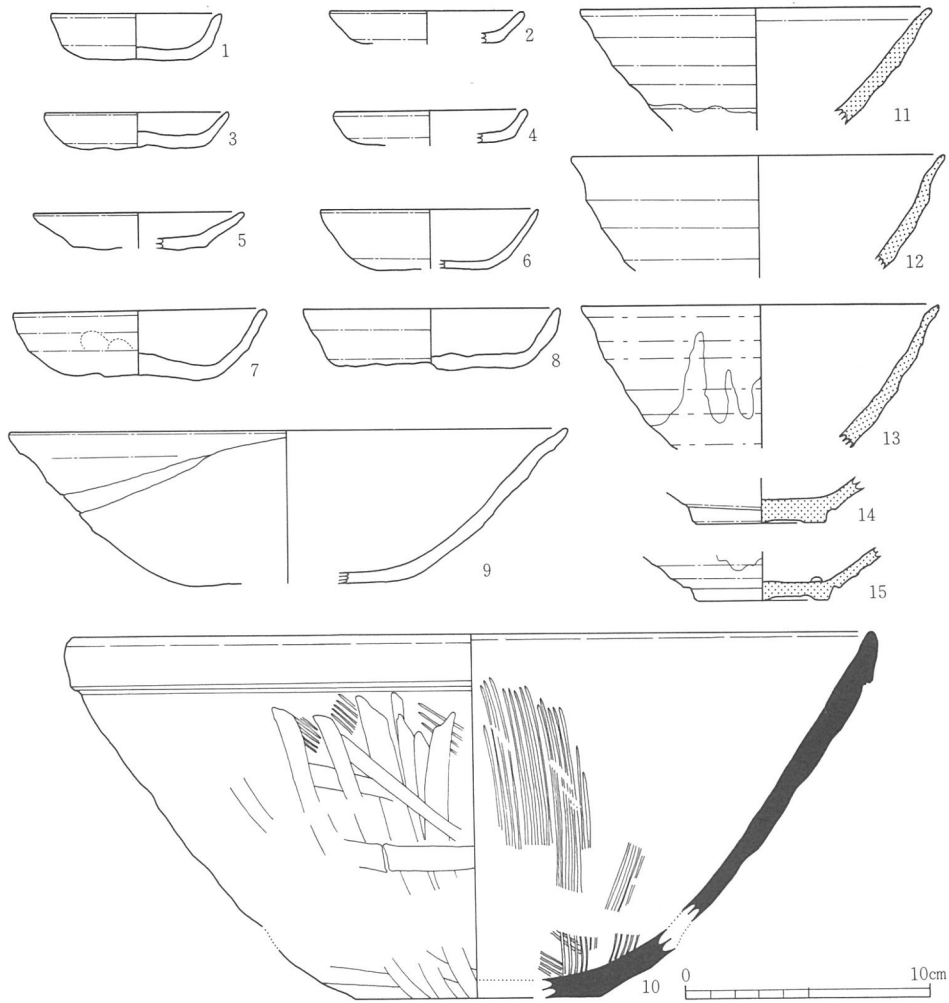
曲輪4の南端部の西側より検出した。面とりをした方形の石材をコの字に配しており、わずかに焼土がみられる。252-O Xより出土遺物はみられないが、付近から砥石、土師皿、土師小皿、瀬戸椀等石組み (253-O X) D地区 X B、Y B比較的多量に出土した。採光・調理等の機能が推定されよう。(服部)

第27図 石組み (252-O X) 平・断面図

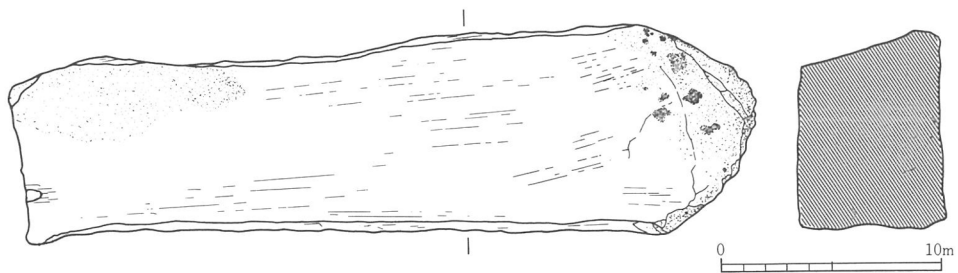


曲輪4の南端部の東側より検出した。剥離面の平行部分を用い、幾つかの石組みの集合によって構成されている。すり鉢、瀬戸椀が出土した。252-O X同様の機能と考えられる。(服部)

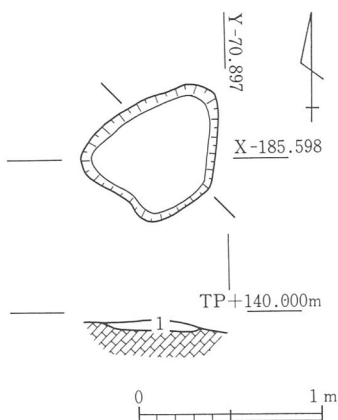
第28図 石組み (253-O X) 平・断面図



第29図 曲輪4 出土遺物(一)



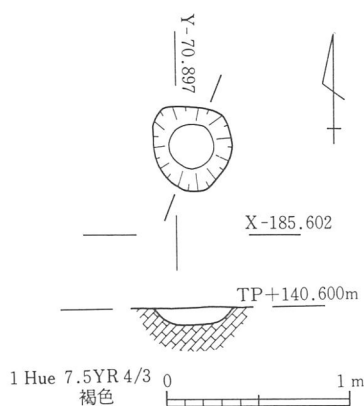
第30図 曲輪4 出土遺物(二)



第31図 土壌 1 (235-00)

土壌 (235-00) D地区 YA

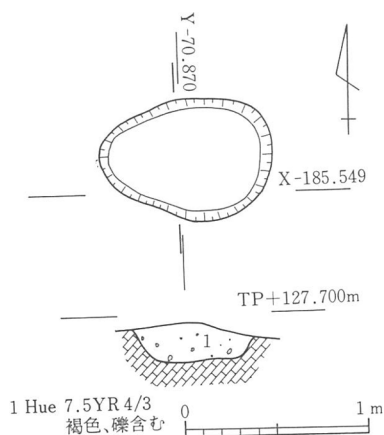
曲輪4の南端部252-0Xの南側で検出された。不整形な円形を呈している。岩盤に焼けた跡があり、規模は東西0.6m×南北0.6mである。出土遺物はなし。(服部)



第32図 土壌 2 (236-00)

土壌 (236-00) D地区 AA

曲輪4の南端部235-00の南側で検出された。235-00同様不整形な円形を呈している。規模は235-00より小さく東西0.3m、南北0.35mを測る。わずかに焼けた跡がみられ、付近より瓦器碗細片が出土した。(服部)

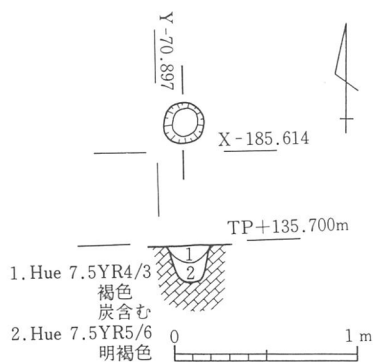


第33図 土壌 3 (233-00)

土壌 3 (233-00) D地区 XA

曲輪4の南傾面に位置する円形を呈する土壌である。小規模で、土壌の埋土内に炭が含まれていることより木杭跡かと思われる。南地20cm、東西23cmを測る。遺物はなし。

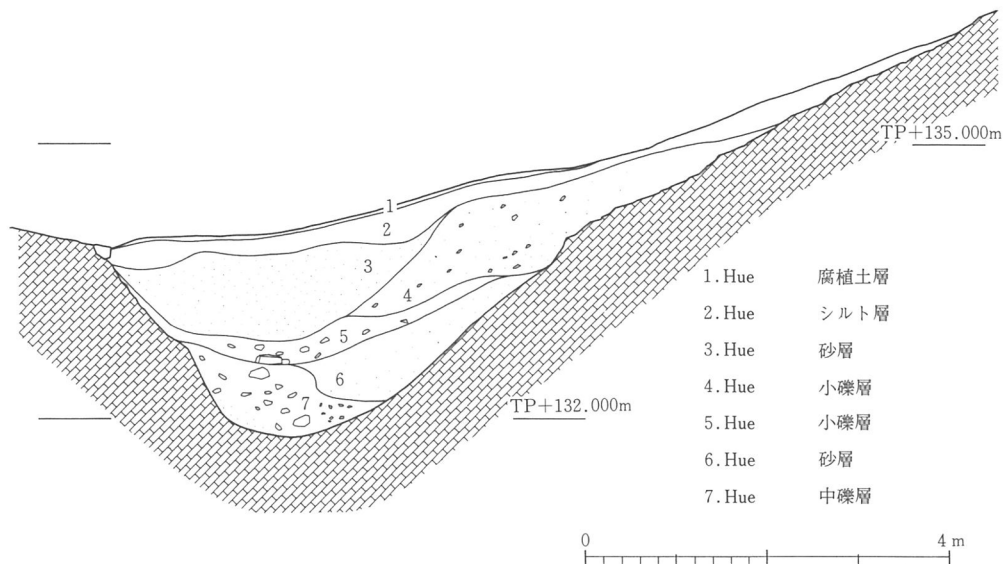
(服部)



第34図 土壌 4 (234-00)

土壌 4 (234-O O) D地区 X A

曲輪 4 の東斜面に位置する楕円形を呈する土壌である。(D地区、X A) 南北56cm、東西40cmを測る。埋土には焼土の他、小礫が含まれる。遺物は検出されなかった為、曲輪 4 が機能していた時間と併行するものか不明である。(服部)



第35図 堀切 (254-O X) 断面図

堀切 (254-O X) D地区 EA、FA、K06EY、FY、DX、FX、DW

曲輪 4 の南斜面、曲輪 5 の北側尾根上に、位置する。

造山活動により隆起した岩盤をたくみにカットしV字状に掘り込んでいる。東西20m、南北5mを測り、曲輪 5 と曲輪 4 を尾根上で遮断する防御的役割をはたしている。

構築後、堀切底部中央には東西方向の石列がみられる (図版24)。埋土は曲輪 4、曲輪 5 の斜面からの二次堆積である。(服部)

曲輪 5 (256-O X)

試掘調査第11トレンチの南端に、盛り土層が確認され曲輪と考えられていたものである。

曲輪 4 の南側の尾根上に自然地形を利用し、小規模な削平地を造りだしている。

面積は東西5m、南地4m、約20㎡を測る (約6坪)。出土遺物は検出されなかった。曲輪 4 と同時期のものか不明である。

曲輪内より、焼土壌を (土壌 5 = 230-O O、土壌 6 = 231-O O、土壌 7 = 232-O O) 検出した。いずれも円形を呈している小型の土壌である。130-O O は東西32cm、南北25cm、

131-〇〇は東西27cm、南北25cm、132-〇〇は東西50cm、南北57cmを測る。遺物はまったく検出しなかった。

土壙 8 (225-〇 X) B地区 F15WG

先端部平坦面のやや上位の北東斜面に位置し、90cm×55cmの不定形プランで最大深度10cmを測る。埋土中には焼土、焼礫が含まれている。遺物は検出していない。(宮野)

土壙 9 (223-〇 X) B地区 F20AK

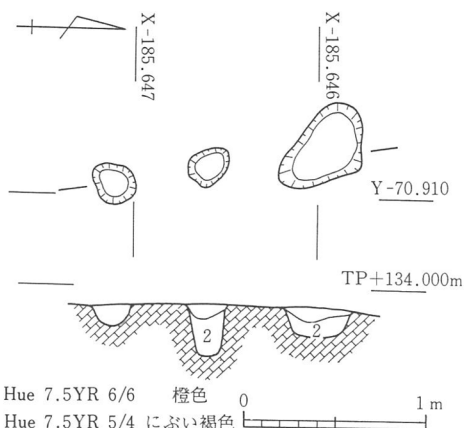
径104cm×97cmの不整円形を呈し、断面は皿状で最大深度23cmを測る。焼土、焼礫を多量に含んでおり、これらは堆積状況から現地性のものと考えられる。遺物は検出していない。(宮野)

土壙 10 (219-〇 X) B地区 F15YM

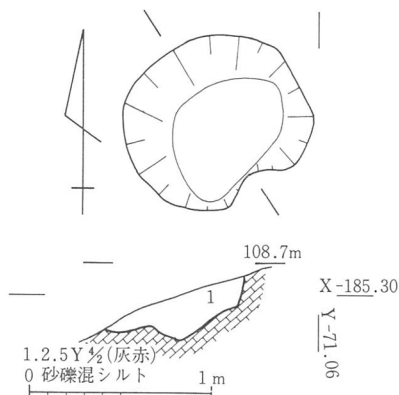
土壙 4 の斜面下方、水平距離で約2mのところを位置する。70cm×60cmの不定形プランで、最大深度は約30cmを測る。埋土中には焼土・焼礫を多量に含んでいる。遺物は検出していない。(宮野)

土壙 11 (217-〇 〇) B地区 F20AM

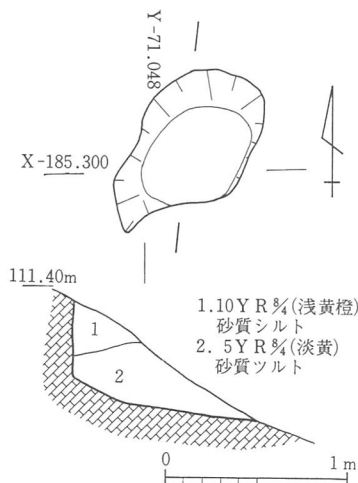
谷口に面する頂部 1 の北側斜面部に位置する。394cm×160cmの不定形プランを呈して焼礫、炭が多量に検出されたため、調査を実施した。結果的には大型の土壙となり、全体に炭、焼土、焼礫が含まれていて、特に北西部の一段深くなった部分に集中している。一段深い部分は径約160cmの不整円形状で、最大深度は58cmを測り、壙底は水平に近い。最下層(第39図 6)には灰、焼土、炭片が含まれ



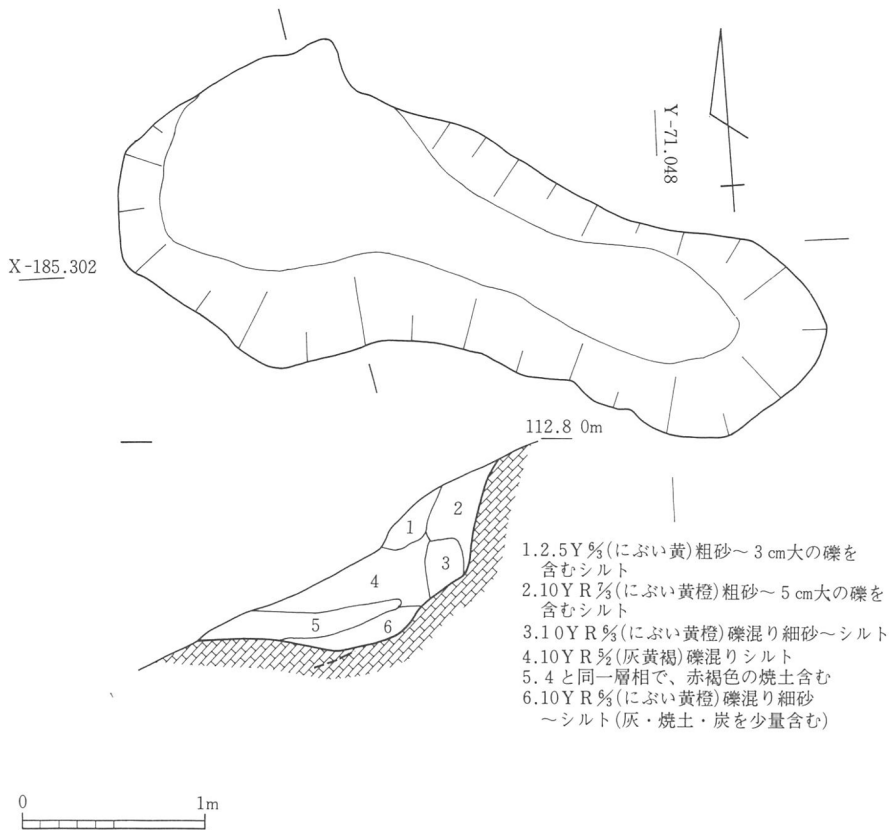
第36図 土壙 5・6・7 (230-〇〇・231-〇〇・232-〇〇) 平・断面図



第37図 土壙 9 (223-〇 X) 平・断面図



第38図 土壙 10 (219-〇 X) 平・断面図



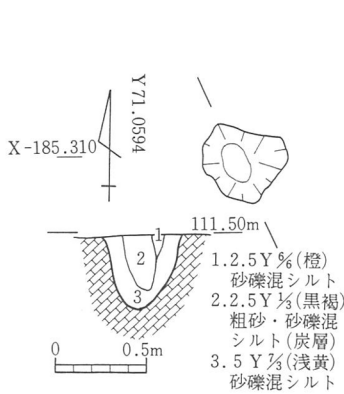
第39図 土壌11 (217-00) 平・断面図

ており、その上層（第39図5）は顕著に熱を受け赤変した土層である。また、その上層（同図4）にも灰、焼土、炭が含まれている。遺物はない。

なお、本土壌は斜面上位においては基盤層と考えられる面においてプランを確認しているが、下位ではⅡ層下部で検出している。斜面下方のⅡ層中には崩落したと思われる炭や焼土が混入しており、本来の遺構面は流失したものと考えられる。（宮野）

土壌12 (222-O X) ・B地区 F 20C F

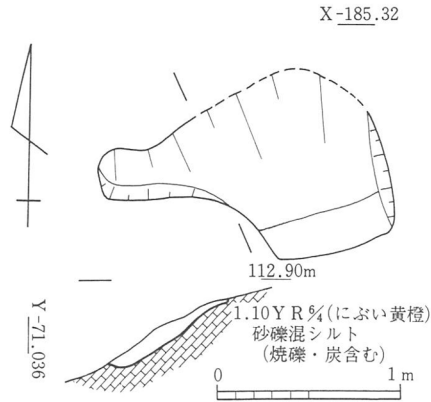
頂部1よりわずかに西側の下った位置にある。平面規模37cm×40cmを測る不整円形プランで、深度は約42cm。中心部に径15cmほどの円筒状に炭が多量に含まれており、その周囲の埋土が火熱を受け赤変している。遺物はない。柱の芯材が焼けたとするには不自然な状況であり、内部で火を燃やしたと考えるのが妥当であろう。（宮野）



第40図 土壌12 (222-O X) 平・断面図

土壌13 (218-O X) B地区 F20F Q。

頂部1の南側斜面に位置し、150cm×110cmの不定形プランを呈し、最大深度15cmを測る。焼土、焼礫を多量に含むが、明確な掘方ではなく、浅い落ち込み状のものと考えられる。(官野)



第41図 土壌13 (218-O X) 平・断面図

土壌14 (228-O X)

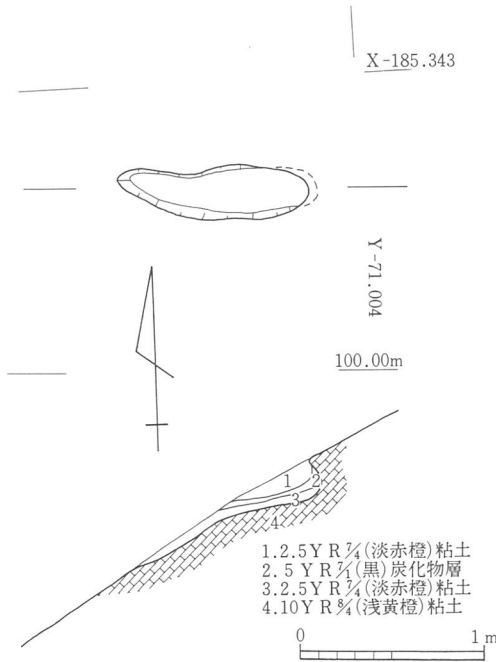
B地区 F20K X。

頂部1と頂部2を繋ぐ丘陵鞍部(標高100.20m)からわずかに東斜面へ下がった位置、標高99.30mで検出した。土壌の平面形は細長い楕円形で、東西方向に長軸をとる。土壌の規模は東西径92cm、南北径30cmであった。埋土には焼土、炭化物が含まれていた。しかし土壌の壁面や底面に燃焼痕跡は認められなかった。(佐々木)

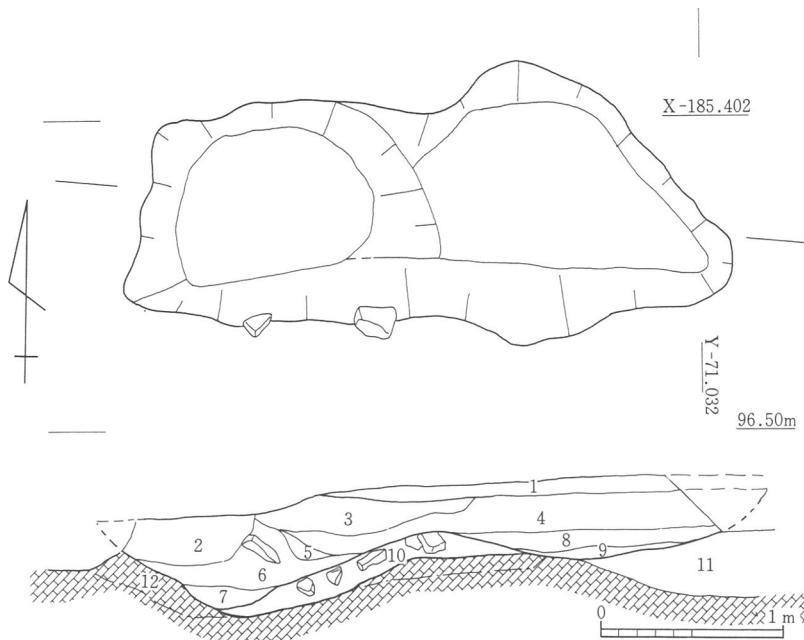
土壌15 (229-O X)

C地区 F25A Q。

頂部2付近から西側へ伸びた小尾根の頂部(標高96.00m)からわずかに南へ下がった位置、標高96.



第42図 土壌14 (228-O X) 平・断面図



- | | | |
|---|---------------------------------------|---|
| 1. 10 Y R $\frac{3}{4}$ (黒褐) 赤く焼けた礫を多く含む | 5. 5 Y R $\frac{1}{2}$ (黒) 炭化物層 | 9. 5 Y R $\frac{1}{4}$ (黒) 炭化物層 |
| 2. 10 Y R $\frac{1}{2}$ (明黄褐) 礫を多く含む | 6. 5 Y R $\frac{1}{2}$ (明赤褐) 礫を多く含む | 10. 2.5 Y R $\frac{1}{2}$ (橙) 焼土 |
| 3. 5 Y R $\frac{1}{2}$ (橙) 礫を多く含む | 7. 5 Y R $\frac{1}{4}$ (黒) 炭化物層 | 11. 10 Y R $\frac{1}{2}$ (明黄褐) 礫まじり、微砂 |
| 4. 10 Y R $\frac{1}{2}$ (明黄褐) 赤く焼けた礫を多く含む | 8. 5 Y R $\frac{3}{4}$ (暗赤褐) 炭化物の片を含む | 12. 10 Y R $\frac{1}{2}$ (明黄褐) 岩盤微砂(地山) |

第43図 土壙15 (229-O X) 平・断面図

00mで検出した。土壙の平面形は不整形な楕円形で、東西方向に長軸をとる。土壙の規模は東西338cm、南北156cm、深さ68cmであった。埋土には焼土、炭化物が含まれていた。土壙土壙壁・底面に燃焼痕跡が認められた。土壙埋土中からは炭化物以外の遺物は出土しなかった。(佐々木)

ピット1 (216-O P) B地区 F15 X N。

径22.5cm×24cmの円形に近いプランを有し、深度は約40cmを測る。埋土は5 Y R $\frac{6}{4}$ (にぶい橙) シルトで、最大5cm大の地山礫が含まれる。また、埋土中には炭片や焼土、焼礫が混入している。斜面に位置するが、上方の壁はまっすぐに立ち上がっており、柱もしくは杭としても鉛直方向に立てられていたと考えられる。(宮野)

ピット2 (220-O P) B地区 F15 Y M

径18cm×20cmの円形プランを呈し、深度は約10cmを測る。埋土は10 Y R $\frac{5}{4}$ (にぶい黄褐) 粗砂～礫混じりのシルト。(宮野)

ピット3 (221-O P) B地区 F20 A M

径17cm×22cmの不整形楕円形プランで、深度は29cm。埋土は10 Y R $\frac{3}{4}$ (にぶい黄褐) 粗砂

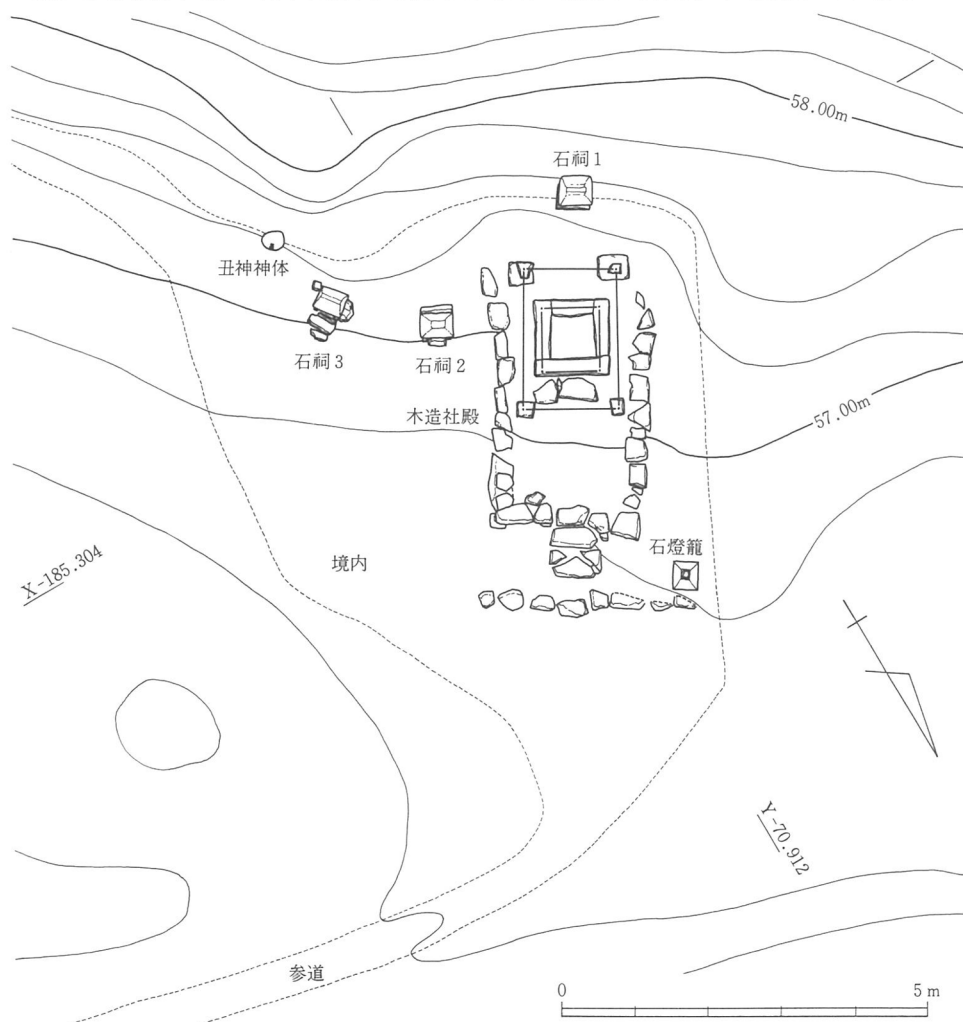
・砂礫混じりシルトで、炭片を含んでいる。掘方は斜面に対し直交である。

ピット1～3は頂部1の北側から北東側斜面、曲輪3や土塙3・4に近接した位置にあり、遺構の集中する場所になっている。柱とは考えられず、おそらく3カ所とも杭状のものであろう。ただ、ピット1・3では、土塙と同じような焼土や炭片を埋土中に含んでおり、やや問題が残る。
(宮野)

第3節 飯ノ峯神社、石祠

A. 飯ノ峯神社 (第44図、図版29)

飯ノ峯神社は、飯ノ峯川の左岸、頂部1から東へ派生する尾根の山麓部、やや北寄りに



第44図 飯ノ峯神社平面図

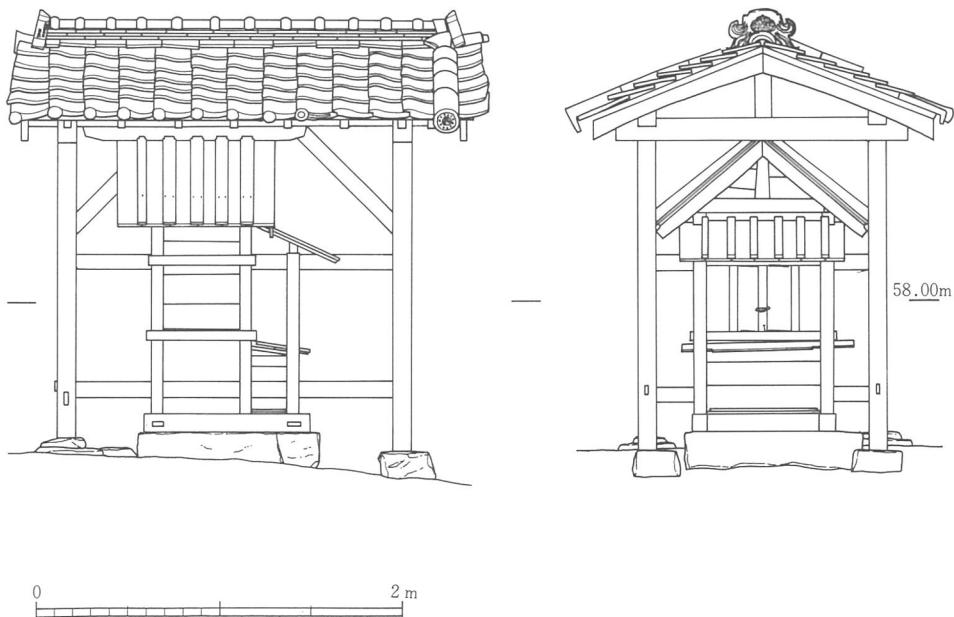
位置する。集落の奥、北西から南東にかけての谷沿いには水田が経営されており、神社はその最南端部の水田に囲まれた山林中に存在している。飯ノ峯神社はまた飯峯畑神社ともいうが、地元では一般に「奥の宮さん」もしくは「畑の宮さん」と呼称している。また神社の鎮座する地域には、字「宮の内」という地名が遺されている。

神社の周辺には喬木、灌木からなる林があるが、神社に関する構築物の周囲は樹木がまばらとなり、輪郭はやや不明瞭ながら境内ともいべき空間を形成している。この境内は東西7.0m、南北7.0mの不整形な平面形を示しているが、入り口に当たる南東部には長さ3.0mにわたって直線的な石列を設け、意図的な区画をみせる。標高は56.7～57.5mで、南西から北東へ下がる緩傾斜を示している。

境内にある構築物は、覆屋を伴った木造社殿1社、和泉砂岩製祠3座、丑神の二文字を刻字した神体として信仰されている自然石1基で、社殿の前方には石燈籠1基が存在する。これらの構築物は概ね北東に面している。社殿は境内の南西に位置していて、その北東側に構築物のない空間がある。石祠は1座が社殿の後方、2座はその南東に設置されている。丑神神体石は境内の南端部に位置している。 (西村)

木造社殿 (第45図、図版29)

社殿は基壇、社殿本体、覆屋で構成される。



第45図 木造社殿正面図・側面図

基壇は和泉砂岩の割り石を配列して区画を形成したもので、北東から南西にかけて長い方形に形成されているが、南西側の辺を欠いている。長辺3.5m、短辺2.0m、北東辺での高さ0.25mである。地面の傾斜に直交して形成されているため、南西に向かうに従い地面との相対的な高さを減じる。基壇を形成するにあたっては後背の山裾を幅約4m、奥行き約2mにわたって切り崩している。基壇の前面中央には割り石を積んで2段の石段を付設する。幅は0.6mである。区画の内部には土盛りを施し、社殿を築くための平坦面を形成している。この平坦面の標高は57.0m前後である。基壇上の手前から約1.5mまでは、拝所としての空間に充てている。

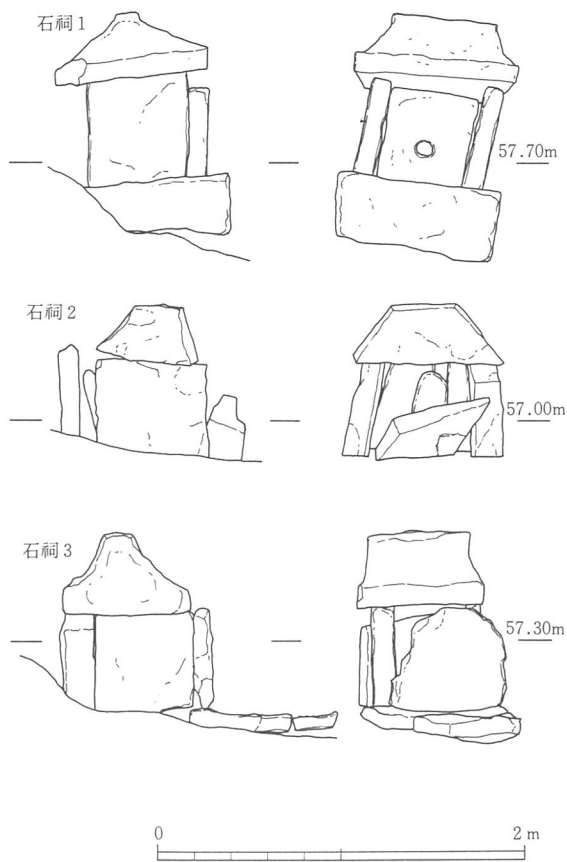
社殿は基壇上の後方に位置している。一辺20cmの角柱状に調整した切石を1m角の方形に組み合わせて社殿の基礎とする。これに一辺10cmの角材をやはり方形に組んで形成した木製台輪を設置し、上部に社殿本体を構築している。社殿は基底石よりやや南東にずれて設置されている。社殿は板葺屋根の切妻、高床形式で、壁面は横板壁で構成される。扉は両開きで北東に面した妻入りである。その前方には身舎から0.48m張り出した庇が取り付けられている。庇は板葺きで24°の勾配を持つ。扉の下部には幣等を供える供物台を付設する。また庇部分の基壇上には上面が平らな割り石を埋設している。社殿の方位はN-30°-Eを示す。社殿身舎は1間×1間で、桁行0.55m、梁間0.77m、台輪底面からの高さ1.70m、床の高さ0.50mである。社殿本体の柱は6cm角の方柱で高さ1.04m、庇の柱は直径7cmの円柱で高さ0.87mである。屋根は21°の勾配を持っていて、妻の下部には破風板を備えている。社殿前面の柱の高床部分は3枚の横板壁を立て、背後を目隠しする。棟木の長さは1.24mで、両端が上方に反っている。

覆屋は切妻、瓦葺である。柱の基底部には一辺が25~40cmに調整した割り石を据えて礎石としている。1間×1間、桁行1.93m、梁間1.36mで、礎石上の高さは2.40m、棟の長さは2.60mである。柱は10cm角の方柱で高さ1.69mである。覆屋はやや南東へ傾斜をみせているため、左右から屋梁に支持棒をあてがって倒壊を予防していた。屋根は40°の勾配を持つ。主として棧瓦葺であるが、前面の妻に限り本瓦葺となっていて、丸瓦が平降棟を形成している。東側の軒丸瓦は巴瓦である。棟瓦には熨斗瓦、雁振瓦を用い、棟の両端に鬼瓦を配する。なお、境内の東端の雑木中には、覆屋の屋根瓦の葺き残りと思われる棧瓦数枚が積んであった。

(西村)

石祠 (第46図、図版29)

石祠は合計3座を数えるが、いずれも加工した石材を組み合わせて構築されている。基



第46図 石祠正面図・側面図

扉石は方形で、両側石の間にはめ込んでいる。扉石の中央には、直径5cm弱の小孔を穿つ。屋根の形態は入母屋造を模している。丁寧な造りで、ノミによる加工痕は顕著ではない。全高65cm。

石祠2

木造社殿の南東側に位置する祠で、基底部の標高は57.0mである。側面の側板はそれぞれやや内傾し、扉石は比較的厚い造りで、前方に開いて傾いている。表面からは底石は観察されなかった。内部には神体と思われる幅10cm、高さ20cm以上、厚さ5cmの板石が設置してある。屋根の形態は寄棟造を模している。棟の部分には平坦面を持つ。全体的に造りが粗く、ノミによる加工痕が明瞭である。全高42cm。

石祠3

石祠2の南東1mの地点に位置する祠で、基底部の標高は57.1mである。扉石は半楕円

本的には板石1枚を底石として、その上に側面と背面の壁体を構成する板石を三方に立て並べる。前面には扉石を設置するが、開閉のための特別な仕様はない。これらの壁石の上部に屋根の形態を模倣して彫刻した石材を乗せている。すべて平入りであるが、屋根の形状には入母屋と寄棟の二種類があるほか、細部に若干の変異がある。石祠3座には西から東へ1～3まで番号を付して区別する。

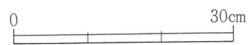
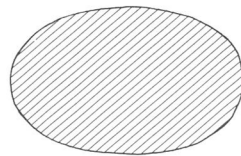
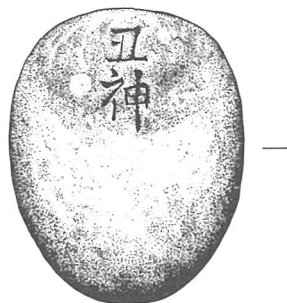
石祠1

木造社殿の後背に位置する祠で、山裾の切り崩した部分に設置されている。基底部の標高は57.5mである。傾斜地にあるため、前面下部に割石をかませて安定させているが、全体的に北西へ傾いている。

形の板石で、両側石との間に間隙を生じている。前面に
 方形の板石を設置して供物台を形成する。屋根の形態は
 入母屋造を模している。全体的に造りが粗く、ノミによ
 る加工痕が明瞭である。全高53cm。 (西村)

丑神神体 (第47図、図版30)

和泉砂岩の角のとれた河原石に丑神と刻字したもので
 ある。刻字以外には加工の痕跡は認められない。石は高
 さ40cm、幅32cm、厚さ20cmで、正面観は楕円形を呈して
 いる。この上半中央部に丑神の二文字を縦方向に刻字す
 る。ただし、神社内においては石材の下半部は地下に埋
 設されており、刻字の部分までが地表から観察された。(西村)



第47図 牛神神体実測図

石燈籠 (図版30)

木造社殿の前方、社殿に向かって右側の神社入り口に
 位置している。宝珠の先端を欠くが完存に近く、全高は
 1.61m。竿に節はなく、享保13 (1728)
 年の銘を刻印する。銘文は縦書きで4
 行にわたる。

邑中

戌

享保十三年 稔正月吉日

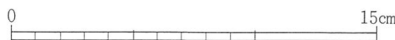
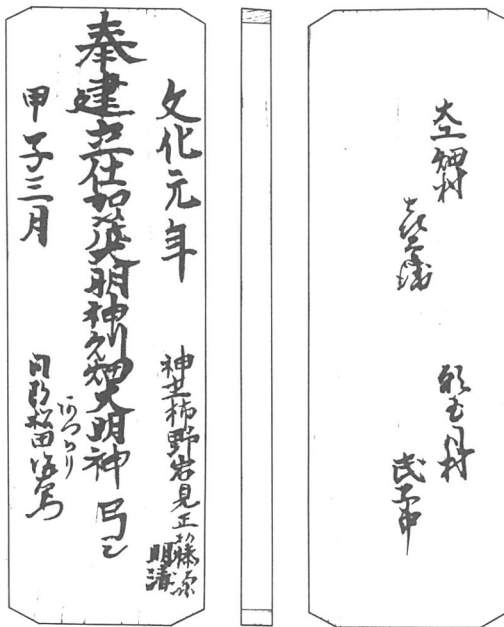
申

宝珠と請花とは一石で造り出し、請
 花は4弁で間弁を伴う。基礎と中台は
 無地で共に竿受座を造り出す。

木造社殿に関連する棟札と、覆屋の
 瓦について報告する。 (西村)

棟札 (第48図、図版30)

社殿の高床下部に廃材と共に置かれ
 ていた。文化元年 (1804) 甲子三月付
 の墨書がある。この棟札は長さ25cm、



第48図 文化元年棟札実測図